

序

塚本昌則

二十世紀末以降、文学は終わったと、さかんに言われるようになった。社会で事件が起こったとき、それが何を意味するのか作家の言葉を聞きたいという人が、いまだだけいるだろうか。文学は社会に語りかける言葉を失った、それが文学終焉論の大きな論点となっている。

例えば、ウイリアム・マルクスは、文学が自己の自律性という神話のなかに立てこもり、社会に語りかけるのをある時点で止めてしまったと断じている（『文学との訣別』、二〇〇五年／邦訳、水声社、二〇一九年）。かつて文学、とりわけ小説は、一見特異な人物が経験する、ありえないような出来事を通して、自分たちがどのような時代を生きているのかを読者に語りかける芸術形式だった。科学や人文系の学問とは異なる、独特な探究の方法と考えられていたのだが、文学の創造的側面は、現実に関わろうとする意志を失うことで、急速に色褪せていくこととなった。柄谷行人は、感性的な娯楽のための読み物だった小説が、「共感」による共同体創設の基盤となったという歴史を振り返っている。しかし小説は、国民国家の礎となるという課題からある時点で解放され、

「ただの娯楽」になる過程をたどっている（『近代文学の終わり』、二〇〇五年）。小説は、共感を通して共同体創生に貢献するという、近代社会において果たした役割を終えたというのである。

文学はかつて、同時代の社会を認識する方法と考えられていたが、いまでは愛好者を喜ばせる娯楽となった。文学がもっていた、私たちの生きている時代を認識する方法という側面は、歴史学、社会学、人類学、精神分析学、美術史、イメージ論、フィクション論など、二十世紀に飛躍的に発展した人文科学によって奪われていった。残されたものは、感性に訴えかける娯楽としての位置だけだ。あらゆる絆を断ち切って、社会とはもはや運命をともにしないと意思込んでいる芸術を、社会がついに見限ったとしても驚くべきことではない——文学終焉論が展開するこのような見取り図は、本当に当を得たものだろうか。感性的な娯楽にすぎなかった芸術が、自律性の幻想のうちに立てこもったことで、社会から見放されたという視点は本当なのだろうか。この疑問は、文学の動きだけを見ても解くことができない。この見取り図の当否を問うためには、それらの学問と文学との境界領域で何が起きているのかを調査する必要があるだろう。調査を通して、文学が現在陥っている状況について、その全貌を明らかにできなかつたとしても、少なくともその一面を明確に捉えることができるようになるのではないか。

そのような問題意識から、鈴木雅雄氏と一緒に、文学と人文科学の境界を探ることを目指す研究会を今から五年ほど前に立ち上げた。二十世紀、文学と人文科学の知が、いかにして互いを見出しあい、つきまといあい、挑戦しあったのか。人文科学の研究者、文学研究者、そして二つの領域を横断する研究者と対話を重ねながら、新たな文学の姿を明らかにする——それが当初掲げた目標だった。その調査の旅は、途中でコロナウイルス感染症拡大にともない、研究会が対面で開催できなくなつて途方に暮れるなど、当初の予定通りにはまつたく運ばなかつた。それ以上に、当初は予想していたなかつた問題に遭遇して当惑することにもなつた。研究者たちと対話を重ねるうちに、問題の所在は文学と人文科学の関係というより、両者が現実と切り結ぶ関係のうちにあるのでは

ないかと考えるようになったのである。

文学においてであれ、人文科学においてであれ、その根底にある営みは、現実との格闘にあるのではないか。文学も、使命を見失った娯楽となり果てたとしても、歴史上それまでになかった状況と格闘しながら生きている人間の姿を捉えようとしているのではないか。人文科学にしても、それまで意識されていなかった視点から現実を捉えなおすことを使命としているのではないか。つまり、文学にせよ、人文科学にせよ、そこで繰り広げられている活動は、現実に関わりかけ、そこから何らかの意義のある答えを引きだそうとして悪戦苦闘する、これまでに人間が繰り返してきた身振りなのではないか。

このような経緯を経て、現実とは何か、という問いを、あらためてそれぞれの分野の専門家に投げかけてみた。本書は、その問いを核として編まれた論文集である。

現実とは何か。改めてこのような問いを発してみると、これが適切な疑問ではないかもしれないことが、編者の一人として痛感したことである。現実には、外から見てそれとわかる輪郭がそなわっているわけではない。ある明確な本質をもっていない。むしろ逆に、ひとつの対象として、距離をおいて眺めることなどできないものこそ、そこにあるものではない。むしろ逆に、ひとつの対象として、現実はそのようなひとつの考察の対象として現実と呼ばれているものではないだろうか。自分で考えれば何かはわかると思い込んでいるような主体のあり方そのものをひっくり返す力をもったものに出会ったとき、人は何ともいえない現実の力を感じるように思われる。もう少し言うなら、普段、意識しないままそのなかで生きている、日常生活の保護膜のようなものが破られ、自分がどういいう世界に生きているのかまるでわからなくなる、そのような思いに人を誘うものが現実ではないだろうか。

表現するための言葉がなく、そのような世界があるとさえ気づかずにいる世界——そのような世界とは無縁のごく普通の状態で、問うことができる問いがあるとすれば、どうすれば現実に接近できるのかという疑問だろう。

これまでの考え方の枠組みそのものが壊れ、そこに新しい世界が現れたとき、ひとは強い現実感に打たれるのだが、そうした知識や意図が通用しない出来事に遭遇するために、いったいどんなことができるのだろうか。そのような世界があると気づくことさえできない世界に、どうすれば接近できるのだろうか。

現実への接近という視点から見ると、本論集に収められた論文では、大きく分けて二つのアプローチがなされている。一方に、何が起こっているのかわからないものの、とにかく注意を凝らして待つという態度がある。何かがあると感じられるのだが、それが何であるのかわからないものに、ひたすら耳を澄ませ、眼差しを凝らす。そのような待機のどこから現実がその姿をわずかなりとも垣間見せるのかはわからないが、とにかく待っているしかないと念じる態度は、確かにさまざま現実の姿を招き寄せるようなのだ。

他方には、最初から現実ではないとわかっているものと戯れ、そこから何か立ちあらわれるのを待つ態度がある。初めから現実ではないとわかっている虚実皮膜の虚や、目の前にある物質的なイメージと、これは現実ではないと知りながらいつまでも戯れている。すると、現実ではない何かが、どこかで現実に反転してゆく瞬間が訪れることがある。虚構とイメージとはあまりに次元の異なる事象に見えるかもしれない。しかし、想像と現実の中間領域に位置しているという点で、両者は共通している。その中間領域に、フィクションとイメージは私たちを連れだす力をもっているようなのだ。嘘を通してしか近づくことができない真実というものが存在するのである。

本書は便宜的に文学、人文科学、イメージ論、マンガ論の四つの章に分かれているが、以下、その区分にこだわらず、現実へのアプローチという視点から読み直す作業を試みたい。この読解の試みは、本書の最後で鈴木雅雄氏に引き継がれる。それだけでなく、久保昭博氏と中田健太郎氏にも、それぞれフィクション論、イメージ論の立場から、論考の解説をお願いした。久保氏は、文学、人文科学関係の論考を集めた第一部を中心に、中田氏には美術史、イメージ論、マンガ論を集めた第二部を中心に論じていただいた。読者の方々は、現実とは何かと

いう問いをめぐる考察が、まったく異なる道筋を描きだすことに驚かれることだろう。二人の編者、二人の読解者が行った読解の試みは、興味深いことに、そのすべてが違った角度からなされている。どの角度から見ると、各論考が違った側面を見せる。まるで現実への問いかけは、誰が見ても同じであるような図式を描きだすかわりに、その度ごとに異なる軌跡を生み出すかのようなのである。そこにこそ、現実と呼ばれるもののはらむダイナミズムがあるのかもしれない。

それでは収録された論文に即して、具体的に見ていくことにしよう（以下敬称略）。

1 錯綜体としての現実

それまで可能とは思えなかったことが、ある時でできるようになる、そんな人間の備わった潜在的な能力を、ヴァレリーは「錯綜体」と呼んでいる。言葉にならない体験が、ある時言葉になる。ばらばらに思っていた事象が、結晶の種を投げこまれた過飽和溶液のように、整然とした形に結晶化する。あるいは、何も起こらない凡庸な日常のなかに、その外観を根底からくつがえす力の存在を探りあてる。そのような変化が起こらなければ、気づくことさえできなかった現実には直面するとき、人が発揮する能力が、錯綜体である。

錯綜体は、言語や身体のパフォーマンスのように、個人差が大きく現れる能力だが、その潜在的な能力が現実のものとなる過程には共通したものがある、とヴァレリーは指摘する。何らかの偶然が感性に働きかけてきたとき、その能力は呼び起こされるのだ。呼びかけに応える力が自分にあると、あらかじめわかっているわけではない。注意力を研ぎ澄ませて何かを待っていると、それに呼応する何かがある。答えははじめはつきりとしていない呼びかけに、その答えが正確に対応するものだったとわかるのだが、それに先立って自分のように答える能力があるということを知らない。錯綜体は、ある明確に定義できる対象ではなく、また姿